

世相

織田作之助

青空文庫

凍てついた夜の底を白い風が白く走り、雨戸を敲くのは寒さの音である。厠に立つと、窓硝子に庭の木の枝の影が激しく揺れ、師走の風であつた。

そんな風の中を時代遅れの防空頭巾を被つて訪れて来た客も、頭巾を脱げば師走の顔であつた。青白い浮腫がむくみ、黝い隈が周囲に目立つ充血した眼を不安そうにしよぼつかせて、「ちよつと現下の世相を……」語りに来たにしては、妙にソワソワと落ちて着きがない。綿のはみ出た頭巾の端には「大阪府南河内郡林田村

第十二組、檜橋廉吉（五十四歳）A型、勤務先大阪府南河内郡林田村林田国民学校」と達筆だが、律義そうなその楷書の字が薄給で七人の家族を養っているというこの老訓導の日々の営みを、ふと覗かせているようだった。口髭の先に水洩が光って、埃も溜っているのは、寒空の十町を歩いて来たせい許りではなからう。

「先日聴いた話ですが」と語りだした話も教師らしい生硬な語り方で、声もポソポソと不景気だった。

「……壕舎ばかりの隣組が七軒、一軒当り二千円宛出し合うて牛を一頭……いやなに密殺して闇市へ売却するが肚でがしてね。ところが買って来たものの、屠殺の方法が判らんちゆう訳で、首の静脈を切れちゆう者もあれば眉間を棍棒で撲るとええちゆう訳で、

夜更けの焼跡に引き出した件の牛を囲んで隣組一同が、そのウ、わいわい大騒ぎしている所へ、夜警の巡査が通り掛って一同をひつくくって行ったちゆう話でがして、巡査も苦笑してちゆうこととで、いやはや……。笑い話といえばでがすな、私の同僚でそのウ、昨今の困窮にたまりかねて、愈々家族と相談の結果、闇市へ立つ決心をしたちゆうことでがす。ところが闇市でこつそり拵げた風呂敷包にはローソクが二三十本、俺だけは断じて闇屋じゃないと言うちゆう、まるで落し話ですな。ローソクでがすから闇じゃないちゆう訳で……。けっけっけっけ……」

自分で洒落を説明すると、まず私の顔をうかがってこう笑うのだったが、笑いはすぐ髭の中にもぐり込み、眼は笑っていないか

った。肚の底から面白がっている訳でもなく、聴いている私もまた期日の迫った原稿を気にしながらでは、老訓導の長話がむしろ迷惑であった。机の上の用紙には、

（千日前の大阪劇場の楽屋の裏の溝板の中から、ある朝若い娘の屍体が発見された。検屍の結果、他殺暴行の形跡があり、犯行後四日を経ていると判明した。家出して千日前の安宿に泊り毎日レヴュ小屋通いをしている内に不良少年に眼をつけられ、暴行のあげく殺害されたらしく、警察では直ちに捜査を開始したが、犯人は見つからず事件は迷宮に入ってしまった）

と、書出しの九行が書かれているだけで、あと続けられずに放つてあるのは、その文章に「の」という助辞の多すぎるのが気に

なっているだけではなかった。その事件を中心に昭和十年頃の千日前の風物誌を描こうという試みをふと空しいものに思う気持が筆を洩らせていたのだ。千日前のそんな事件をわざわざ取り上げて書いてみようとすると物好きな作家は、今の所私のほかには無さそうだし、そんなものでも書いて置けば当時の千日前を偲ぶよすがにもなろうとは言うものの、近頃放送されている昔の流行歌も聴けば何か白々しくチグハグである。溝の中に若い娘の屍体が横たわっているという風景も、昨日今日もはや月並みな感覚に過ぎない。老大家の風俗小説らしく昔の夢を追うてみたところで、現代の時代感覚とのズレは如何ともし難く、ただそれだけの風俗小説ではもう今日の作品として他愛がなさ過ぎる……。そう思えば

筆も進まなかつたが、といて「ただそれだけ」の小説にしないためにはどんなスタイルを発見すればよいのだろうか、思案に暮れていた矢先き、老訓導の長尻であつた。

けれども律儀な老訓導は無口な私を聴き上手だと見たのか、なおポソポソと話を続けて、

「……ここだけの話ですが、恥を申せばかくいう私も闇屋の真似事をやろうと思つたんでがして、京都の堀川で金巾……宝籤の副賞に呉れるあの金巾でがすよ、あれを一ヤール十七円で売るちゆう話を聴きましたな、何しろ闇市じゃ四十五円でがすからな。帰つて家内に相談しましてね、貯金ありつたけ子供の分までおろしたり物を売つたりして、やつと八千両こしらえましてな、一人じ

や持てないちゆうんで、家族総出、もつとも年寄りと小さいのは留守番にして総勢五人弁当持ちで朝暗い内から起きて京都の堀川まで行つたんですが……、いや、目的の金巾はあることはあつたんですが、先方の言うのには千万円単位でなくちや渡せんちゆう訳でがしてね、スゴスゴ戻つて来ると、もう夜でがした……」

年の暮の一儲けをたくらんで簡単に狸算用になつてしまつたかと聴けば、さすがに気の毒だったが、しかし老訓導は急に早口の声を弾ませて、

「——しかし行つてみるもんでがすな、つまりその、金巾は駄目でがしたが、別口の耳寄りな話かがしてな、光が一箱十円であるちゆうんでがすよ。もつとも千箱単位でがすが、しかしどうでが

す、十円なら廉うがアしよう。買いませんかな」

と、やはり煙草を売りに来たのだった。いくら口銭を取るのか知らないが、わざと夜を選んでやって来たのも、小心な俄か闇屋らしかった。

「千箱だと一万円ですね」

「今買うて置かれたら、来年また上りますから結局の所……」

「しかし僕は一万円も持っていませんよ」

当にしていた印税を持って来てくれる筈の男が、これも生活に困って使い込んでしまったのか途中で雲隠れしているのだと、ありていに言うと、老訓導は急に顔を赧くした。断られてみれば闇屋もふと恥しい商売なのであろうか。

老訓導は重ねて勧めず、あわてて村上浪六や菊池幽芳なども私の前では三度目の古い文芸談の方へ話を移して、暫らくもじもじしていたが、やがて読む気もないらしい書物を二冊私の書棚から抜き出すと、これ借りますよと起ち上り、再び防空頭巾を被つて風のように風の中へ出て行つた。

風はなお吹きやまず、その人の歸つて行く十町の道の寒さを私は想つたが、けれども哀れなその老訓導にはなお八千円の金はあり、私には五千円もないのかと思えば、貧乏同志形影相憐むとはいうものの、どちらが形か影かと苦笑された。そしてふと傍の新聞を見れば、最近京都の祇園町では芸妓一人の稼ぎ高が最高月に十万円を超えると、三段抜きの見出である。

国亡びて栄えたのは闇屋と婦人だが、闇屋にも老訓導のような哀れなのがあり、握り飯一つで春をひさぐ女もいるという。やはり栄えた筆頭は芸者に止めをさすのかと呟いた途端に、私は今宮の十銭芸者の話を聯想したが、同時にその話を教えてくれた「ダイス」のマダムのことも思い出された。「ダイス」は清水町にあったスタンド酒場で、大阪の最初の空襲の時焼けてしまったが、「ダイス」のマダムはもと宗右衛門町の芸者だったから、今は京都へ行って二度の棲を取っているかも知れない。それともジョージ・ラフトの写真を枕元に飾らないと眠れないと言っていたから、キャバレエへ入って芸者ガールをしているのだろうか。粋にもモダンにも向く肉感的な女であった。

早くから両親を失い家をなくしてしまった私は、親戚の家を居候して歩いたり下宿やアパートを転々と変えたりして来たためか、天涯孤独の身が放浪に馴染み易く、毎夜の大阪の盛り場歩きもふと放浪者じみていたので、自然心齋橋筋や道頓堀界限へ出掛けても、絢爛たる鈴蘭燈やシャンデリヤの灯や、華かなネオンの灯が眩しく輝いている表通りよりも、道端の地蔵の前に蠟燭や線香の火が揺れていたたり、格子の嵌ったしもた家の二階の蚊帳の上に鈍い裸電燈が点っているのが見えたり、時計修繕屋の仕事場のスタ

ンドの灯が見えたりする薄暗い裏通りを、好んで歩くのだった。

その頃はもう事変が戦争になりかけていたので、電力節約のためであろうネオンの灯もなく眩しい光も表通りから消えてしまっていたが、華かさはなお残っており、自然その夜も——詳しくいえば昭和十五年七月九日の夜（といまなお記憶しているのは、その日が丁度生国魂神社の夏祭だったばかりでなく、私の著書が風俗壊乱という理由で発売禁止処分を受けた日だったからで）——私は道頓堀筋を歩いているうちに自然足は太左衛門橋の方へ折れて行った。橋を渡り、宗右衛門町を横切ると、もうそこはずり落ちたように薄暗く、笠屋町筋である。色町に近くどこか艶めいていながら流石に裏通りらしくうらぶれているその通りを北へ真っ

直ぐ、軒がくずれ掛ったような古い薬局が角にある三ツ寺筋を越え、昼夜銀行の洋館が角にある八幡筋を越え、玉の井湯の赤い暖簾が左手に見える周防町筋を越えて半町行くと夜更けの清水町筋に出た。右へ折れると堺筋へ出る、左へ折れると心齋橋筋だ。私はふと立停つて思案したが、やはり左へ折れて行つた。しかし心齋橋筋へ出るつもりはなく、心齋橋筋の一つ手前の豊屋町筋へ出るまでの左側にスタンド酒場の「ダイス」があるのだった。

その四五日前、私は「ダイス」のマダムから四ツ橋の天文館のプラネタリウム見物を誘われた。彼女は私より二つ下の二十七歳、路地長屋の爪楊枝の職人の二階を借りた六畳一間ぐらしの貧乏な育ち方をして来たが、十三の歳母親が死んだ晩、通夜にやつ

て来た親戚の者や階下の爪楊枝の職人や長屋の男たちが、その六畳の部屋に集つて、嬉しい時も悲しい時もこれだすわと言いながら酔い痴れているのを、階段の登り口に寝かした母親の屍体の枕元から、しょんぼり眺めていた時、つくづく酒を飲む人間がいやらしく思つた筈なのに、やがて父親の後妻にはいつて来た継母との折れ合いが悪くて、自分から飛び出して芸者になると、一年たたぬ内に大酒飲みとなつてしまつたという。引かされて清水町で「ダイス」の店をひらいたのは二十五の歳だったが、旦那が半年で死んでしまうと、酒のあとで必ず男のほしくなる体を浮氣の機会あるたびに濡らしはじめ、淫蕩的な女となつた。何を思つたのか私を掴んでも「わては大抵の職業の男と関係はあつたが文士だ

けは知らん」と、意味ありげに言うかと思うと、「あんたはわてを水揚げした旦那に似ている」とうつとりした眼で見つめながら、いきなり私の膝を抓るのであった。「こら何をする」と私は端たなく口走る自分に愛想をつかしながら、それでも少しはやに下つて、誘われるとうかうかと約束してしまったのだが、翌日約束の喫茶店へ半時間おくれてやって来たマダムを見た途端、私はああ大変なことになったと赧くなった。芸者上りの彼女は純白のドレスの胸にピンクの薔薇をつけて、頭には真紅のターバン、真黒のレースの手袋をはめている許りか、四角い玉の色眼鏡を掛けているではないか。私はどんな醜い女でも喜んで歩くのだが、どんな美しい女でもその女が人眼に立つ奇抜な身装をしている時は辟

易するのがつねであつた。なるべく彼女と離れて歩きながら心齋橋筋を抜け、川添いの電車通りを四ツ橋まで歩き、電気科学館の七階にある天文館のバネ仕掛けで後へ寄り掛れるようになった椅子に並んで掛けた時、私ははじめてほつとしてあたりに客の黝いのを喜びながら汗を拭いたが、やがて天井に映写された星のほかには彼女の少し上向きの低い鼻の頭も見えないくらい場内が真っ暗になると、この暗がりをもつけの倅いだと思つた、それほど辟易していたのだ。ところが、べつの意味でもつけの倅いだつたのはむしろマダムの方で、彼女は星の動きにつれて椅子のバネを利用しながらだんだん首を私の首の方へ近づけて来たかと思うと、いきなりペタリと頬をつけ、そして口に口を合わせようとした。

私は起ちあがると、便所へ行つた。そして手を洗つてから昇降機で一階まで降りると、いつの間に降りていたのか、マダムは一階の昇降機の入口に立つて済ました顔でこちらを睨んでいた。そして並んで四ツ橋を渡り、文楽座の表まで来ると、それまでむっと黙っていた彼女は、疝高い早口の声で、

「こんど店へ来はつたら、一ぺん一緒に寝まひよな」とぐんと肩を押しながら赧い顔もせずと言つた。心齋橋筋まで来て別れたが、器用に人ごみの中をかきわけて行くマダムのむっちり肉のついた裸の背中に真夏の陽がカンカン当たっているのを見ながら、私はこんど「ダイス」へ行けば危いと呟いた途端、マダムは急に振り向いたが、派手な色眼鏡を掛けた彼女の顔にはなぜかうらぶれた寂

しい翳があり、私もうらぶれた。

そんなことがあつてみれば、その夜、ことに自作が発売禁止処分を受けて、もう当分自分の好きな大阪の庶民の生活や町の風俗は描けなくなつたことで気が滅入り、すっかりうらぶれた隙だらけの気持になつている夜、「ダイス」のマダムに会うのはますます危いと私は思ったが、しかしいつの間にか私の手は青い内部の灯が映っている硝子張りの扉を押していた。途端にボックスで両側から男の肩に手を掛けていた二人の女が、「いらつしやい」と起ち上つたが、その顔には見覚えはなく、また内部の容子が「ダイス」とはまるで違つている。あ、間違つて入つたのかと、私はあわてて扉の外へ出ると、その隣の赤い灯が映っている硝子扉を

押した途端、白地に黒いカルタの模様をついた薩摩上布に銀鼠色の無地の帯を緊め、濡れたような髪の毛を肩まで垂らして、酒にほてった胸をひろげて扇風機に立っていた女が、いらっしやいとも言わず近眼らしく眼の附根を寄せて、こちらを見ると、一寸頭を下げた。それが「ダイス」のマダムの癖であった。

「今隣へはいりかけたんだよ」

「浮気者！ おビール……？」

「周章者と言って貰いたいね。うん、ビールだ。あはは……」

私は軽薄な笑い声を立てながら、コップに注がれたビールを飲むとうとすると、マダムは私の手を押えて、その中へブランデーを入れ、

「判つとうすな。ブランデーどっせ」わざと京都言葉を使った。日頃彼女が「男と寝る前はブランデーに限るわ」と言ったのを、私は間抜けた顔で想い出し、ますます今夜は危なそうだった。赤い色電球の灯がマダムの薩摩上布の白を煽情的に染めていた。

閉店時間を過ぎていたので、客は私だけだった。マダムはすぐ酔つ払ったが、私も浅ましいゲップを出して、洋酒棚の下の方へはめた鏡に写った顔は仁王のようであった。マダムはそんな私の顔をにやつと見ていたが、何思ったのか。

「待っててや。逃げたらあかんし」と蓮葉に言つて、赤い斑点の出来た私の手の甲をぎゅつと抓ると、チャラチャラと二階の段梯子を上つて行つたが、やがて、

「——ちよんの間の衣替え……」と歌うように言つて降りて来たのを見ると、真赤な色のサテン地の寝巻ともピジャマともドイストもつかぬ怪しげな服を暑くるしく着ていた。作業服のように上衣とズボンが一つになっていて、真中には首から股のあたりまでチャックがついている。二つに割れる仕掛になっているのかと私は思わず噴き出そうとした途端、げつと反吐がこみあげて来た。あわてて口を押え、

「食塩水……」をくれと情ない声を出すと、はいと飲まされたのは、ジンソーダだ。あつとしかめた私の顔を、マダムはニイツと見ていたが、やがてチャックをすつと胸までおろすと、私の手を無理矢理その中へ押し込もうとした。円い感触にどきんとして、

驚いて汗ばんだ手を引き込めようとしたが、マダムは離さずぎゅつと押えていたが、何思つたか急に、

「ああ辛気臭ア」と私の人さし指をキリキリと噛みはじめた。痛いツと引抜いて、

「見ろ、血がにじんでるぞ。こらツ、齒型も入れたな」

そう怒りながら、しかしだらしのない声を出して少しはやに下り気味の自分が、つくづく情けなくなっていると、マダムは気取つた声で、

「抓りや紫、食いつきや紅よ、色で仕上げた……」云々と都々逸であつた。

私は悲しくなつてしまつて、店の隅で黙々と洗い物をしている

マダムの妹の、十五歳らしい固い表情をふと眼に入れながら、もう帰るよと起ち上ったが、よろめいて醜態であった。

「這うて帰る積り……？」その足ではと停めるのを、

「帰れなきや野宿するさ。今宮のガード下で……」

「へえ……？ さては十銭芸者でも買う積りやな」

「十銭……？ 十銭何だ？」

「十銭芸者……。文士のくせに……」知らないのかという。

「やはり十銭漫才や十銭寿司の類なの？」

帰るといったものの暫らく歩けそうになかったし、マダムへの好奇心も全く消えてしまっていたわけではない。「風俗壊乱」の文士らしく若気の至りの放蕩無頼を気取って、再びデンと腰を下

し、頼杖ついて聴けば、十銭芸者の話はいかにも夏の夜更けの酒場で頹廢の唇から聴く話であつた。

もう十年にもなるだろうか、チエリーという煙草が十銭で買えた頃、テンセン（十銭）という言葉が流行して、十銭寿司、十銭ランチ、十銭マーケット、十銭博奕、十銭漫才、活動小屋も割引時間は十銭で、ニュース館も十銭均一、十銭で買え、十銭で食べ十銭で見られるものなら猫も杓子も飛びついたことがある。十銭芸者もまたその頃出現したものだが、しかしこの方は他の十銭何々のように全国を風靡した流行の産物ではない。十銭芸者——彼女はわずかに大阪の今宮の片隅にだけその存在を知られたはかない流行外れの職業婦人である。今宮は貧民の街であり、ルンペン

の巢窟である。彼女はそれらのルンペン相手に稼ぐけちくさい売笑婦に過ぎない。ルンペンにもまたそれ相応の饗宴がある。ガード下の空地に莫蔭を敷き、ゴミ箱から漁つて来た残飯を肴に泡盛や焼酎を飲んでさわぐのだが、たまたま懐の景気が良い時には、彼等は二銭か三銭の端た金を出し合つて、十銭芸者を呼ぶのである。彼女はふだんは新世界や飛田の盛り場で乞食三味線をひいており、いわばルンペン同様の暮しをしているのだが、ルンペンから「お座敷」の掛つた時はさすがにバサバサの頭を水で撫で付け、襟首を白く塗り、ボロ三味線の胴を風呂敷で包んで、雨の日など殆んど骨ばかしになった蛇の目傘をそれでも恰好だけ小意気にさし、高下駄を履いて来るだけの身だしなみをするという。花代は

一時間十銭で、特別の祝儀を五銭か十銭はずむルンペンもあり、そんな時彼女はその男を相手に脛もあらわにはつと固唾をのむよ
うな嬌態を見せるのだが、しかし肉は売らない。最下等の芸者だ
が、最上等の芸者よりも清いのである。もつとも情夫は何人もい
る。……

語っているマダムの顔は白粉がとけて、鼻の横にいやらしくあ
ぶらが浮き、息は酒くさかった。ふつと顔をそむけた拍子に、蛇
の目傘をさした十銭芸者のうらぶれた裾さばきが強いイメージと
なって頭に浮んだ。現実のマダムの乳房への好奇心は途端に消え
て、放蕩無頼の風俗作家のうらぶれた心に降る苛立たしい雨を防
いでくれるのは、もはや想像の十銭芸者の破れた蛇目傘であつた。

これは書けると、作家意識が酔い、酒の酔は次第に冷めて行つた。丁度そこへ閉つていたドアを無理矢理あけて、白いズボンが斬り込むように、

「一杯だけでいい。飲ませろ」とはいつて来た。左翼くずれの同盟記者で大阪の同人雑誌にも関係している海老原という文学青年だったが、白い背広に蝶ネクタイというきちんとした服装は崩したことはなく、「ダイス」のマダムをねらっているらしかつた。

私を見ると、顎を上げて黙礼し、

「しみりやつてる所を邪魔したかな」とマダムの方へ向いた。

「阿呆らしい。小説のタネをあげてましてん。十銭芸者の話……」とマダムが言いかけると、

「ほう？　今宮の十銭芸者か」と海老原は知っていて、わざと私の顔は見ずに、

「——オダサク好みだね。併し君もこういう話ばかり書いているから……」

「発売禁止になる……」と言い返すと、いやそれもあるがと、注がれたビールを一息に飲んで、

「——それよりもそんな話ばかり書いているから、いつまでたつても若さがないとと言われるんだね」そう言い乍ら突き上げたパナマ帽子のように、簡単に私の痛い所を突いて来た。

「いや、若さがないのが僕の逆説的な若さですよ。——僕にもビール、あ、それで結構」

「青春の逆説というわけ……？」 発売禁止になった私の著書の題は「青春の逆説」だった。

「まあね、僕らはあんた達左翼の思想運動に失敗したあとで、高等学校へはいったでしょう。左翼の人は僕らの眼の前で転向して、ひどいのは右翼になってしまったね。しかし僕らはもう左翼にも右翼にも随って行けず、思想とか体系とかいったものに不信——もつとも消極的な不信だが、とにかく不信を示した。といって極度の不安状態にも陥らず、何だか悟ったような悟らないような、若いのか年寄りなのか解らぬような曖昧な表情でキョロキョロ青春時代を送って来たんですよ。まあ、一種のデカダンスですね。あんた達はとにかく思想に情熱を持っていたが、僕ら現在二十代

のジエネレーションにはもう情熱がない。僕はほら地名や職業の名や数字を夥しく作品の中にばらまくでしょう。これはね、曖昧な思想や信ずるに足りない体系に代るものとして、これだけは信ずるに足る具体性だと思つてやってるんですよ。人物を思想や心理で捉えるかわりに感覚で捉えようとする。左翼思想よりも、腹をへらしている人間のペコペコの感覚の方が信ずるに足るといわけ。だから僕の小説は一見年寄りの小説みたいだが、しかしその中で胡坐をかいているわけではない。スタイルはデカダンスですからね。叫ぶことにも照れるが、しみじみした情緒にも照れる。告白も照れくさい。それが僕らのジエネレーションですよ」

私はしどろもどろの詭弁を弄していたのだ。「青春の逆説」と

は不潔ないいわけであつた。若さのない作品しか書けぬ自分を時代のせいにし、ジェネレーションの罪にするのは卑怯だぞと、私は狼狽してコップを口に当てたが、泡は残つた。

しかし海老原は一息に飲み乾して、その飲みっぷりの良さは小説は書かず批評だけしている彼の気楽さかも知れなかつた。だから、

「君には思想がわからないのだよ。不信といつても一々疑つてからの不信とは思えんね」と高飛車だつた。

「だから、消極的な不信だといつてるじゃないですか」

思わず声が大きくなり、醜態であつた。

「それが何の自慢になる」

海老原はマダムに色目を使いながら言った。私は黙った。口をひらけば「しかしあんたには十銭芸者の話は書けまい」と嫌味な言葉が出そうだったからだ。ひとつには、海老原の抱いている思想よりも彼の色目の方が本物らしいと、意地の悪い観察を下すことによつて、けちくさい溜飲を下げたのである。私は海老原一人をマダムの前に残して「ダイス」を出ることで、議論の結末をつけることにした。

「じゃ、ごゆっくり」

マダムも海老原がいるので強いて引き止めはしなかったが、ただ一言、

「阿呆？ 意地悪！」

背中に聴いて「ダイス」を出ると暗かった。夜風がすつと胸に
来て、にわかには夜の更けた感じだった。鈴の音が聴えるのはアイ
スクリーム屋だろうか夜泣きうどんだろうか。清水町筋をすぐ豊
屋町の方へ折れると、浴衣に紫の兵古帯を結んだ若い娘が白いワ
イシャツ一枚の男と肩を並べて来るのにすれ違った。娘はそつと
男の手を離れた。まだ十七八の引きしまった顔の娘だが、肩の線
は崩れて、兵古帯を垂れた腰はもう娘ではなかった。船場か島ノ
内のいたずら娘であろうか。（船場の上流家庭に育った娘、淫奔
な血、家出して流転し、やがて数奇な運命に操られて次第に淪落
して行った挙句、十銭芸者に身を落すまでの一生）しかし、これ
では西鶴の一代女の模倣に過ぎないと思いつながら、阪口楼の前ま

で来た。阪口楼の玄関はまだ灯りがついていていた。出て来た芸者が男衆らしい男と立ち話していたが、やがて二人肩を寄せて宗右衛門町の方へ折れて行った。そのあとに随いて行き乍ら、その二人は恋仲かも知れないと思つた。(十銭芸者がまだ娘の頃、彼女に恋した男がいる。その情熱の余り女が芸者になれば自分も男衆として検番に勤め、女が娼妓になれば自分もその廓の中の牛太郎になり、女が料理屋の仲居になれば、自分も板場人になり、女が私娼になれば町角で客の袖を引く見張りをし、女が十銭芸者になればバタ屋になつて女の稼ぎ場の周囲をうろつく——)という風に、絶えず転々とする女の後を追ひ、形影相抱く如く相憐れむ如く、女と運命を同じゆうすることに生甲斐を感じている)この男

を配すれば一代女の模倣にならぬかも知れないと、眩き乍ら宗右衛門町を戒橋の方へ折れた。橋の北詰の交番の前を通ると、巡査がじろりと見た。橋の下を赤い提灯をつけたボートが通った。橋を渡るとそこにも交番があり、再びじろりと見た。（犯罪。十銭芸者になった女は、やがて彼女を自分のものにしようとするルンペン達の争いに惹き込まれて、ある夜天王寺公園の草叢の中で、下腹部を斬り取られたままで死んでいる。警察では直ちに捜査、下手人は不明。ところが、間もなくあれは自分がやったのだと、自首して来た男がいる。事件発生後行方を韜ませていたバタ屋である。調べると、自分は何十年も前から女の情夫であつたといひ、嫉妬ゆえの犯行だと陳述するが、しかしだんだん調べると、陳述

の辻褄が合わない。兇器も出て来ないし、陳述そのものがアリバイになつていくくらいである。警察では真犯人は別にいると睨む。果して犯人は捕まる。バタ屋がいつわつて自首したのは、自分以外の人間が女の下腹部を斬り取つて殺したということに、限りない嫉妬を感じたからである。その時女は五十一歳、男は五十六歳——とする）戎橋筋は銀行の軒に易者の鈍い灯が見えるだけ、すっかり暗かったが、私の心にはふと灯が点つていた。新しい小説の構想が纏まりかけて来た昂奮に、もう発売禁止処分の憂鬱も忘れて、ドスンドスンと歩いた。

難波から高野線の終電車に乗り、家に帰ると、私は蚊帳のなかに腹ばいになつて、稿を起した。題は「十銭芸者」——書きなが

ら、ふとこの小説もまた「風俗壊乱」の理由で闇に葬られるかも知れないと思つたが、手錠をはめられた江戸時代の戯作者のことを思えば、いつそ天邪鬼な快感があつた。デカダンスの作家ときめられたからとて、慌てて時代の風潮に迎合するというのも、思えば醜体だ。不良少年はお前だと言われるともはやますます不良になつて、何だいと尻を捲くのがせめてもの自尊心だ。闇に葬るなら葬れと、私は破れかぶれの気持で書き続けて行つた。

三

あれから五年になると、夏の夜の「ダイス」を想い出しながら、

私は夜更けの書齋で一人水漬をすすった。

扇風機の前で胸をひろげていたマダムの想出も、雨戸の隙間から吹き込む師走の風に首をすくめながらでは、色気も悩ましさもなく、古い写真のように色あせていた。踊子の太った足も、場末の閑散な冬のレヴュ小屋で見れば、赤く寒肌立って、かえって見ている方が悲しくうらぶれてしまう。興冷めた顔で漬をかんでみると、家人が寝巻の上に羽織をひっかけて、上って来た。砂糖代りのズルチンを入れた紅茶を持って来たのである。

「夜中におなかですいたら、水屋の中に餅がはいってますから……」勝手に焼いて食べろ、あたしは寝ますからと降りて行こうとするのを呼び停めて、

「あの原稿どこにあるか知らんか。『十銭芸者』——いつか雑誌社から戻って来た原稿だ」十日掛って脱稿すると、すぐある雑誌社へ送ったのだが、案の定検閲を通りそうになかったのである。案の定だから悲観もしなかった。

「ああ、あれ、友達に貸したんじゃない？」

家人は吐きだすように言った。私がそのような小説を書くのがかねがね不平らしかった。良家の子女が読んでも眉をひそめないような小説が書いてほしいのであろう。私の小説を読むと、この作者はどんな悪たれの放蕩無頼かと人は思うに違いないと、家人にはそれが恥しいのであろう。親戚の女学校へ行っている娘は、友達の間で私の名が出るたび、肩身がせまい想いがするらしい。

「そうだったかな。しかし誰に貸したんだろうな」

「一人じゃないでしょう。来る人来る人に喜んで読ませてあげていたでしょう」悪趣味だという口つきだった。

「最後に貸したのは誰だったかな。——忘れた。ズルチン呆けしたかな」ズルチンはサツカリンより甘いが、脳に悪影響があるからやめると、最近友人の医者から聴いていた。

「——誰だか忘れたが、たぶん返しに来た筈だ。押入の中にはいつていないか」

「ギア」と、それでも押入の戸は明けて、

「——今いるんですの？」

「まあいいや、無ければ。今書いている原稿の代りに『十銭芸者』

を送ろうと思ったんだけど……。その方が労がはぶけていいが、しかし……」今書いている千日前の話が一向に進まないのは時代との感覚のズレが気になってからだとすれば、それ以上にズレている筈の古い原稿を労をはぶいて送るのも如何なものだと、私はボソボソ口の中で呟いた。

「今書いてらっしゃるのは……？」

「千日前の大阪劇場の裏の溝の中で殺されていた娘の話だ。レヴュに憧れてね。殺されて四日間も溝の中で転がっていたんだが、それと知らぬレヴュガールがその溝の上を通って楽屋入りをしていたんだ。娘にとっては本望……」

「また殺人事件ですか」呆れていた。

「またとは何だ。あ、そうか、『十銭芸者』も終りに殺されたね」
「いつか阿部定も書きたいとおっしゃったでしょう。グロチツク
ね」

私の小説はグロテスクでエロチックだから、合わせてグロチツクだと、家人は不潔がっていた。

「ああ、今も書きたいよ。題はまず『妖婦』かな。こりや一世一代の傑作になるよ」

家人は嘖きだしながら降りて行った。私はそれをもつけの俵いに思った。なぜ阿部定を書きたいのかと訊かれると、返答に困ったかも知れないのだ。所詮はグロチツク好みの戯作者気質だと言えと言えるものの、しかしただそれだけではなかった。が、その

理由は家人には言えない。

阿部定——東京尾久町の待合「まさき」で情夫の石田吉蔵を殺害して、その肉体の一部を斬り取って逃亡したという稀代の妖婦の情痴事件が世をさわがせたのは、たしか昭和十一年五月であったが、丁度その頃私はカフェ美人座の照井静子という女に、二十四歳の年少多感の胸を焦がしていた。

美人座は戎橋の北東詰を宗右衛門町へ折れた掛りにあり、道頓堀の太左衛門橋の南西詰にある赤玉と並んで、その頃大阪の二大カフェであつた。赤玉が屋上にムーラン・ルージュをつけて道頓堀の夜空を赤く青く染めると、美人座では二階の窓に拡声機をつけて、「道頓堀行進曲」「僕の青春」「東京ラプソディ」などの

蓮ッ葉なメロデイを戎橋を往き来する人々の耳へひつきりなしに送っていた。拡声機から流れる音は警察から注意が出るほど気狂い染みた大ききさで、通行人の耳を聳させてまで美人座を宣伝しようという悪どいやり方であつた。最初私が美人座へ行つたのは、その頃私の寄宿していた親戚の家がネオンサインの工事屋で、たまたま美人座の工事を引受けた時、クリスマス会の会員券を売付けられ、それを貰つたからであるが、戎橋の停留所で市電を降り、戎橋筋を北へ丸万の前まで来ると、はや気が狂つたような「道頓堀行進曲」のメロデイが聴えて来た。美人座の拡声機だとわかると、私は急に辟易してよほど引き返そうと思つたが、同行者があつたのでそれもならず、赤い首を垂れて戎橋を渡ると、思い切つ

て美人座の入口をくぐった。

その時の本番（などといやらしい言葉だが）が静子で、紫地に太い銀糸が縦に一本はいったお召を着たすらりとした長身で、すつとテーブルへ寄つて来た時、私はおやと思つた。細面だが額は広く、鼻筋は通り、笑うと薄い唇の両端が窪み、耳の肉は透きとおるように薄かつた。睫毛の長い眼は青味勝ちに澄んで底光り、無口な女であつた。

高等学校の万年三年生の私は、一眼見て静子を純潔で知的な女だと思ひ込み、ランボオの詩集やニイチエの「ツアラトウストラ」などを彼女に持つて行くという齒の浮くような通いかたをした挙句、静子に誘われてある夜嵐山の旅館に泊つた。寝ることになり、

私はわざとらしく背中を向けて固くなっていたが、一つにはそれが二人にふさわしいと思つたのだ。それほど静子は神聖な女に見えていたのである。そして暫くじつとしてみると、

「どうしたの」白い手が伸びて首に巻きつき、いきなり耳に接吻された。

あとは無我夢中で、一種特別な体臭、濡れたような触感、しびれるような体温、身もだえて転々する奔放な肢体、気の遠くなるような律動。——女というものはいいやや男のされるがままになつているものだと思ひ込んでいた私は、愚か者であつた。日頃慎重ましくしていても、こんな場合の女はがらりと變つてしまうものかと、間の抜けた觀察を下しながら、しかし私は身も世もあらぬ

気持で、

「結婚しようね、結婚しようね」と浅ましい声を出していた。

すると静子は涙を流して、

「駄目よ、そんなこと言っちゃ。あたし結婚出来る体じゃないわ」

そして、自分は神戸でダンサーをしていたときに尼崎の不良青年と関係が出来て、それが今まで続いているし、その後京都の宮川町でダンス芸者をしていた頃は、北野の博奕打の親分を旦那に持ったことがあり、またその時分抱主や遣手への義理で、日活の俳優を内緒の客にしたこともあると、意外な話を打ち明けたが、しかしその俳優の名を三人まで挙げている内に、もう静子の顔は女給が活動写真の噂をしている時の軽薄な調子になっていた。

「——あのスター、写真で見るとスマートだけど、実物は割にチビで色が黒いし、絶倫よ」

その言葉はさすがに皆まで聴かず、私はいきなり静子の胸を突き飛ばしたが、すぐまた半泣きの昂奮した顔で抱き締め、そして廁に立った時、私はひきつったような自分の顔を鏡に覗いて、平気だ、平気だ、なんだあんな女と眩きながら、遠い保津川の川音を聴いていた。

女の過去を嫉妬するくらい莫迦げた者はまたとない。が、私はその莫迦者になってしまったのである。しかし莫迦は莫迦なりに、私は静子の魅力に惹きずられながら、しみつたれた青春を浪費していた。その後「十銭芸者」の原稿で、主人公の淪落する女に、

その女の魅力に惹きずられながら、一生を棒に振る男を配したのも、少しはこの時の経験が与っているのだろうか。けれど、私はその男ほどにはひたむきな生き方は出来なかった。彼は生涯女の後を追い続けたが、私は静子がやがて某拳闘選手と二人で満州に走った時、満州は遠すぎると思った。追いもせず大阪に残った私は、いつか静子が角力取りと拳闘家だけはまだ知らないと言っていたのを思い出して、何もかも阿呆らしくなってしまう、もはや未練もなかったが、しかしさすがに嫉妬は残った。女の生理の脆さが悲しかった。

嫉妬は閨房の行為に対する私の考えを一変させた。日常茶飯事の欠伸まじりに倦怠期の夫婦が行う行為と考えてみたり、娼家の

一室で金銭に換算される一種の労働行為と考えてみたりしたが、なお割り切れぬものが残った。円い玉子も切りようで四角いとはいうものの、やはり切れ端が残るのである。欠伸をまじえても金銭に換算しても、やはり女の生理の秘密はその都度新鮮な驚きであつた。私は深刻憂鬱な日々を送つた。

阿部定の事件が起つたのは、丁度そんな時だ。妖艶な彼女が品川の旅館で逮捕された時、号外が出て、ニュースカメラマンが出動した。いわば一代の人気女であつたが、彼女はこの人気を閨房の秘密をさらけ出すことによつて獲得した。さらけ出された閨房は彼女の哀れさの極まりであつたが、同時に喜劇であつた。少くとも人々は笑つた。戯画を見るように笑つた。私は笑えなかつた

が、日本の春画がつねにユーモラスな筆致で描かれている理由を納得したと思った。

「リアリズムの極致なユーモアだよ」とその当時私は友人の顔を見るたび言っていたが、無論お定の事件からこんな文学論を引き出すのは、脱線であつたらう。

が、とにかく私は笑えばいいと思った。女の生理の悲しさについて深刻に悩むことなぞありやしない、俺を驚かせた照井静子の奔放な性生活なぞこの女に較べれば、長襦袢の前のしみつたれた安パジャマに過ぎないぞ。そう思うことによつて、私は静子の肉体への嫉妬から血路を開こうとした。お定を描こうと思った。

二十四歳の私がお定を描きたいと言うのを聴いて、友人は変な

顔をした。

「そりやよした方がいい。あんまりひどすぎる。高橋お伝ならまだしも……」と真面目に忠告してくれる友人もあつた。

しかし、私は阿部定の公判記録の写しをひそかに探していた。物好きな弁護士が写して相当流布していると聴いたからである。が、幸か不幸か公判記録の持主にめぐり会うことは出来なかつた。そして空しく七年が過ぎて殆ど諦めかけていたある日、遂にそれを手に入れることが出来た。雁次郎横丁の天辰の主人がたまたま持っていたのである。

雁次郎横丁——今はもう跡形もなく焼けてしまっているが、そしてそれだけに一層愛惜を感じ詳しく書きたい気もするのだが、雁次郎横丁は千日前の歌舞伎座の南横を西へはいつた五六軒目の南側にある玉突屋の横をはいつた細長い路地である。突き当つて右へ折れると、ポン引と易者と寿司屋で有名な精華学校裏の通りへ出るし、左へ折れてくねくね曲つて行くと、難波から千日前に通ずる南海通りの漫才小屋の表へ出るというややこしい路地である。この路地をなぜ雁次郎横丁と呼ぶのか、成駒屋の雁次郎とどんなゆかりがあるのか、私は知らないが、併し寿司屋や天婦羅屋や河豚料理屋の赤い大提灯がぶら下つた間に、ふと忘れられたよ

うに格子のはまったしもた家があったり、地蔵や稲荷の蠟燭の火が揺れたりしているこの横丁は、いかにも大阪の盛り場にある路地らしく、法善寺横丁の艶めいた華かさはなくとも、何かしみじみした大阪の情緒が薄暗く薄汚くごちやごちや漂うていて、雁次郎横丁という呼び名がまるで似合わないわけでもない。ポン引が徘徊して酔漢の袖を引いているのも、ほかの路地には見当らない風景だ。私はこの横丁へ来て、料理屋の間にはさまった間口の狭い格子づくりのしもた家の前を通るたびに、よしんば酔漢のわめき声や女の嬌声や汚いゲロや立小便に悩まされても、一度はこんな家に住んでみたいと思うのであった。

天辰はこの雁次郎横丁にある天婦羅屋で、二階は簡単なお座敷

になつてゐるらしかったが、私はいつも板場の前に腰を掛けて天婦羅を揚げたり刺身を作つたりする主人の手つきを見るのだった。主人は小柄な風采の上らぬ人で、板場人や仲居に指図する声もひそびそと小さくて、使つてゐる者を動かすよりもまず自分が先に立つて働きたい性分らしく、絶えず不安な眼をしょぼつかせてチヨコチヨコ動き、律儀な小心者が最近水商売をはじめてうろたえているように見えたが、聴けばもうそれで四十年近くも食物商売をやつてゐるといい、むっちりと肉が盛り上つて血色の良い手は指の先が女のように細く、さすがに永年の板場仕事に洗われた美しさだった。庖丁を使つたり竹箸で天婦羅を揚げたりする手つきも鮮かである。

私はその手つきを見るたびに、いかに風采が上らぬとも、この手だけで岡惚れしてしまう年増女もあるだろうと、おかしげな想像をするのだったが、仲居の話では、大将は石部金吉だす。酒も煙草も余りやらぬという。併し、若い者の情事には存外口喧しくなく、玄人女に迷って悩んでいる板場人が居れば、それほど惚れているのだったら身受けして世帯を持つと、金を出してやったこともあるという。辻占売りの出入りは許さなかったが、ポン引が出入り出来るのはこの店だけだった。そのくせ帝塚山の本宅にいる細君は女専中退のクリスチャンだった。細君は店へ顔出しするようなことは一度もなく、主人が儲けて持って帰る金を教会や慈善団体に寄附するのを唯一の仕事にしていた。ほんまに大将は可

哀相な人だつせと仲居は言うのだったが、主人の顔には不幸の翳はなかつた。

しかし、ある夜——戦争がはじまつて三年目のある秋の夜、日頃自分から話しかけたことのない主人が何思つたのかいきなり、
「あんた奥さん貰うんだつたら、女子大出はよしなさいよ。東条の細君、あれも女子大だといえますぜ。あんたの奥さんにはまあ芸者かな」私を独身だと思つていた。

「女子大出だつて芸者だつてお女郎だつて、理窟を言おうと言うまいと、亭主を莫迦にしようとしまいと、抱いてみりやア皆同じ女だよ」私は一合も飲まぬうちに酔うていた。

「あんたはまだ坊ン坊ンだ。女が皆同じに見えちや良い小説が書

けっこありませんよ。石コロもあれば、搗き立ての餅もあります」
日頃の主人に似合わぬ冗談口だった。

その時、トンビを着て茶色のソフトを被った眼の縁の黝い四十前後の男が、キヨロキヨロとはいつて来ると、のそつと私の傍へ寄り、

「旦那、面白い遊びは如何です。なかなかいい年増ですぜ」

「いらぬ。女子大出の女房を貰ったばかりだ」済まして言った。

「そりや奥さんもいいでしょうが、たまには小股の切れ上った年増の濃厚なところも味ってみるもんですよ。オールサービスべたモーション。すすり泣くオールトーキ」と歌うように言つて、

「——シヨートタイムで帰った客はないんだから」

色の蒼白い男だが、ペラペラと喋る唇はへんに濁った赤さだった。

「だめだ。今夜は生憎ギラがサクイんだ」

ギラとは金、サクイとは乏しい。わざと隠語を使って断ると、そうですか、じゃ今度またと出て行つた。

ほかの客に当らずに出て行つた所を見ると、どうやら私だけが遊びたそうな顔をしていたのかと、苦笑していると、天辰の主人はふと声をひそめて、

「今の男は変つたポン引ですよ。自分の女房の客を拾つて歩いてるんですよ」と言つた。

「女房の客……？　じゃ細君に商売をさせてるの？」

「そうですよ。女房が客を取ってるんですよ。あの男に言わせる
と、女房の客を物色して歩くようになってからはじめてポン引の
面白さがわかったと、言つとりましたがね。あんたも社会の表面
の綺麗ごとばかり見ずに、ああいう男の話を聴いて、裏面も書い
て見たらいい小説が生れるがなア」

「ふーん。そりや惜しいことをしたね」自分の細君に客を取らせ
ているあの男は、嫉妬というものをどんな風に解決しているのか
と、ふと好奇心が湧いた。

「いやそれよりも……」と主人は天婦羅を私の前に載せながら、
「——あんたにいいタネをあげましようか」

「どうぞ。いいタネって何……？ アナゴ……？ 鮓かな」

「いえ、天婦羅のタネじやありませんよ。あはは……。小説のタネですよ」

そう言つて、そわそわと二階へ上つて行つた。天婦羅が揚るのも忘れて、何を取りに行つたのかと思つていると、やがて油紙に包んだものを持つて降りて来た。紐をほどいて、

「これです。一寸珍しいもんですよ」

見れば阿部定の公判記録だつた。

「ほう？　こんなものがあつたの。どうしてこれを……」手に入れたのかと訊くと、

「まあね」と赧くなつて眼をしょぼつかせていた。

「借りていい」

「その代り大事に読んで下さいよ。何しろ金庫の中に入れてるぐらいだから。もつともあんた方は本を大事にする商売の人ですから、間違いないでしょうが。大事に頼みますよ」

そんなにくどくどと勿体をつけられて借りると、私は飛ぶようにして家へかえり、天辰の主人がどうしてこれを手に入れたのか、案外道楽気のある男だと思いつながら、読み出した。謄写刷りの読みにくい字で、誤字も多かつたが、八十頁余りのその記録をその夜のうちに読み終った。

神田の新銀町の相模屋という畳屋の末娘として生れた彼女が、十四の時にもう男を知り、十八の歳で芸者、その後不見転、娼妓、私娼、妾、仲居等転々とした挙句、被害者の石田が経営している

料亭の住込仲居となり、やがて石田を尾久町の待合「まさき」で殺して逃亡し、品川の旅館で逮捕されるまでの陳述は、まるで物悲しい流転の絵巻であつた。ものあわれの文学であつた。石田と二人で情痴の限りを尽した待合での数日を述べている条りは必要以上に微に入り細をうがち、まるで露出狂かと思われるくらいであつたが、しかしそれもありし日の石田の想出に耽るのを愉しむ余りの彼女の描写かと思えば、あわれであつた。早く死刑になつて石田の所へ行きたいと言っているこの女の、最後の生命が輝く瞬間であり、だからこそその陳述はどんな自然主義派の作家も達し得なかつたりアリズムに徹しているのではなからうか。そしてまた、虚飾と嘘の一つもない陳述はどんな私小説もこれほどの

告白を敢てしたことはかつてあるまいと、思われるくらいであった。

本当に文学のようであった。が、この記録を一篇の小説にたとえるとすれば、そのヤマは彼女が石田の料亭の住込仲居になる動機と径路ではなからうか、——彼女は石田の所へ雇われる前、名古屋の「寿」という料亭の仲居をしていた。その時中京商業の大宮校長と知り合つた、大宮校長は検事の訊問に答えて次のように陳述している。

「……私が最初にあの女に会つたのは昨年四月の末、覚王山の葉桜を見に行き、『寿』という料亭に上つた時です。あの女はあそこの女中だったので。その時女は、私は夫に死に別れ、叔母

の所に預けてある九歳になる娘に養育費を送るために、こういう商売をしているのだと言いましたので、非常に気の毒に思いました。十日程たつて今度は娘が死んで東京に帰るとの話でしたので、私は一層同情しました。女が上京すればますます淪落の淵に沈んで行くに違いないと思つたのと、救いがたい悪癖を持つているのに同情したのとで、何とかしてこれを救おうという心情を起し、物質的並に精神的方面より援助を与え彼女を品性のある婦人たらしめようと力を尽したのでした」

こんな体裁のいいことを言っているが、しかし校長は二度目に「寿」へ行つた時、「非常に気の毒に思」つた女に酌をさせながら、けしからぬ振舞いに出ようとしている。女は初めは初心らし

く裾を押えたりしていたが、やがて何の感情もなく言いなりになった。校長は彼女の美貌と性的魅力に参つてしまったのだ。「救いがたい悪癖」と言っているが、しかしこの悪癖が校長を満足させたのだ。だから上京すると言われて驚き、じや時々東京で会うことにしよう。上京した彼女が一先ず落ち着いた所は、ところもあろうに昔彼女が世話になったことのあるいかかわしい周旋屋であつた。文部省へ出頭する口実を設けてしばしば上京するたび、宿屋へ呼び寄せて会っていた校長は、さすがに彼女のいわゆる「叔母の家」の怪しさを嗅ぎつけた。校長はまず彼女に触れたあと、急いで手や口を洗うてから、男女の仲は肉体が第一ではない、精神的にも愛し合わねばならん、お前が真面目になるというなら、

金を出してやるから料理屋でも開いたらどうだ。校長は女を独占したかったのだ。彼女は何をしても直ぐ口や手を洗う水臭い校長を、肉体的にも精神的にも愛することは出来ないと思つたが、くどくど説教されているうちに、さすがにただれ切つた性生活から脱け出して、校長一人を頼りにして、真面目な生活にはいろいろと決心した。しかし、料理屋を開くには、もう少し料理屋の内幕や経営法を知って置いた方がよい。そう思つて口入屋の紹介で住込仲居にはいった先がたまたま石田の店であつた。石田は苦味走つたいい男で、新内の喉がよく、彼女が銚子を持つて廊下を通ると、通せんぼうの手をひろげるような無邪気な所もあり、大宮校長から掛つて来た電話を聴いていると、嫉けるぜと言いながら寄つて

来てくすぐったり、好いたらしい男だと思つている内にある夜暗がりの応接間に連れ込まれてみると、子供っぽい石田が分別くさい校長とは較べものにならぬくらい、女にかけては凄いい男であつた。石田の細君はヒステリーで彼女に辛く当つた。なんだい、あんなお内儀と、石田を取つてやるのがいい気味であり、そしてもう石田を細君の手に渡したくなかつた。二人の仲はすぐ細君に知れて、彼女は暇を取り、尾久町の待合「まさき」で石田に会つた。情痴の限りを尽している内にますます石田と離れがたくなり、石田だけが彼女を満足させた唯一の男であつた。四日流連けて石田は金を取りに歸つた。そして二日戻つて来なかつた。ヒステリーの細君と石田。嫉妬で気が遠くなるような二日であつた。石田が

待合へ戻って来ると、再び情痴の末の虚脱状態。嗅ぎつけた細君から電話が掛る。石田を細君の手へ戻す時間が近づく。しごきを取って石田の首に巻きつける。はじめは閨房のたわむれの一つであった。だから、石田はうっとりとして、もっと緊めてくれ、いい気持だから。そんな遊びを続けているうちに、ぐっと力がある。石田はぐったりする。これで石田は自分のものだ。定吉二人。定は自分の名、吉は石田の名。

.....

真面目になろうと思っただけはいつか石田の所だったとは、なにか運命的である。私はこの運命のいたずらを中心に、彼女の流転の半生を書けば、女のあわれさが表現出来ると思った。が、戦

前の（十銭芸者）の原稿すら発表出来なかつたのだ。戦争はもう三年目であり、検閲のきびしさは前代未聞である。永年探しもとめてやっと手に入れた公判記録だが、もう時期を失っていた。折角の材料も戦争が終るまで役立てることは出来ない。といつてそれまで借りて置くわけにもいかなかつた。

「いずれまた借りますから」と、失わないうちに、私はその公判記録を天辰の主人に返しに行くと、

「そうですか、やっぱり戦争だと書けませんか。私に書く手があれば、引っぱられてもいいから書くんだがなア」

この前より暗くなつた明りの下で、天辰の主人は残念そうに言つた。

五

「今も書きたいよ。題はまづ『妖婦』かな」

家人を相手に言ったのは、何気なく出た冗談だったが、ふと思えば、前代未聞の言論の束縛を受けたあと未曾有の言論の自由が許された今日、永い間の念願も果せるわけだった。

しかし、公判記録を読んでからもう三年になる。三年の歳月は私の記憶を薄らいでしまった。といつて、再び借りに行くとしても、天辰の店は雁次郎横丁と共に焼けてしまい、主人の行方もわからぬし、公判記録も焼失をまぬがれたかどうか、知る由もない。

臆気な記憶をたよりに書けないこともないが、それでは主人公は私好みの想像の女になってしまい、下手すれば東京生れの女を大阪の感覚で描くことになろう。

夜更けの書齋で一人こんな回想に耽っていると、コトンコトンと床の間の掛軸が鳴った。雨戸の隙間からはいる風が強くなって来たらしい。千日前の話は書けそうにもない。私は首を縮めて寝床にはいった。そして大きな嚏を続けざまにしたあと、蒲団の中で足袋を脱いでいると、玄関の戸を叩く音が聞えた。家人は階下で熟睡しているらしい。

風が叩くにしては大きすぎる。といってこんな夜更けに客が来るわけもない。原稿の催促の電報が来たのだろうか。が、近頃の

郵便局は深夜配達をしてくれる程親切ではない。してみれば押込強盜かも知れない。この界限はまだ追剥や強盜の噂も聴かないが、年の暮と共に到頭やって来たのだろうか。そう思いながら、足袋のコハゼを外したままの恰好で、玄関へ降りて行つた。

そつと戸を敲いている。

「電報ですか」

「……………」返辞がない。

家の三軒向うは黒山署の防犯刑事である。半町先に交番がある。間抜けた強盜か、凶太い強盜かと思ひながら、ガラリと戸をあけると、素足に八つ割草履をはいた男がぶるぶる顫えながらちよぼんと立ってうなだれていた。ひよいと覗くと、右の眼尻がひどく

下った文楽のツメ人形のような顔——見覚えがあつた。

「横堀じゃないか」小学校で同じ組だつた横堀千吉だつた。

「へえ。——済んまへん」

ふとあげた顔を面目なさそうにそむけた。左の眼から頬へかけて紫色にはれ上り、血がにじんでいる。師走だというのに夏服で、ズボンの股が大きく破れて猿股が見え、首に汚れたタオルを巻いているのは、寒さをしのぐためであろう。

「はいれ。寒いだろう」

「へえ。おおけに、済んまへん。おおけに」

ペコペコ頭を下げながら、飛び込むようにはいり、手をこすつていた。ほっとしたような顔だつた。たぶん入れて貰えないと思

ったのであろう。もつともそれだけの不義理を私にしていたのだ
った。

横堀がはじめ私を訪ねて来たのは、昭和十五年の夏だった。その頃私の著書がはじめて世に出た。新聞の広告を見て、幼友達を
想いだして来たと言い、実は折入って頼みがある。自分は今散髪
の職人をしているのだが、今度わけがあつてせんに働いていた市
岡の理髪店を暇取つて、新世界の理髪店で働こうと思う。それ
について保証人がいるのだが、自分には両親もきょうだいも身寄り
もない、については保証人になつて貰えないだろうかと言うことだ
った。私はすぐ承知したが、それから二月たたぬ内に横堀は店の
金を持ち逃げした。孤独の寂しさを慰めるために新世界とはつい

鼻の先にある飛田遊廓の女に通っていたが、到頭金に詰ったらしかつた。保証人の私はその尻拭いをした。

ところが、一年ばかりたったある日、尾羽打ち枯らした薄汚い恰好でやって来ると、実はあんな悪いことをしたので「部屋」を追出されてしまった。「部屋」というのは散髪の職人の組合のようなもので、口入れも兼ね、どこの店で働くにしてもそれぞれの「部屋」の紹介状がなければ雇ってくれない、だから「部屋」を追いだされた自分はごらんの通りのルンペンになっているが、今度新しく別の「部屋」に入れて貰うことになったので非常に喜んでいる、ところが「部屋」にはいるには二百円の保証金がある、働いて返すから一時立て替えて貰えないだろうかと言う。横堀は

丈は五尺そこそこの小男で、右の眼尻の下った顔はもう二十九だ
というのに、二十前後のように見える。いつまでも一本立ち出来
ず、孤独な境遇のまま浮草のようにあちこちの理髪店を流れ歩い
て来た哀れなみじめさが、ふと幼友達の身辺に漂うているのを見
ると、私はその無心を断り切れなかった。散髪の職人だというの
に不精髭がぼうぼうと生え、そこだけが大人であつた。商売道具
の剃刀も売ってしまったのかと、金を渡すと、ニコニコして帰っ
て行つたが、それから十日たったある夜更け、しよんぼりやつて
来た姿見ると、前よりもなお汚くなつていた。どうしたんだと訊
くと、いや喜んで貰いたい、自分のような男にも女房になつてや
るといふ女が出来た、自分は少々歪んでても、曲つててもいい、

女房になってくれる女があれば、その女のために一所懸命やろうと思つていたが、到頭その機会が来た、自分は今までの世の中に一人ぼっちだという寂しさからつい僻みが出てやけも起したが、これからは例え二階借りでも世帯を持つものだから、男になって働く覚悟だ、ついては結婚の費用に……と、百円の無心だった。女は何をしている人だ、仲居をしている。どこで。南で。南の何という店だ。大阪の南の料理屋の名前なら大抵知つているのでそう訊いたが、横堀は詰つて答えられない。細君になるという人の勤め先を知らないようでは、結婚の費用は貸してあげないと言うと、じゃ今夜は終電車もないから泊めてくれと言う。

翌朝横堀が帰つたあとで、腕時計と百円がなくなつてゐること

に気がついた。それきり顔を見せなくなつたが、応召したのか一年ばかりたつて中支から突然暑中見舞の葉書が来たことがある。

……

そんな不義理をしていたのだが、しかし寒そうに顫えている横堀の哀れな復員姿を見ると、腹を立てる前に感動的な同情が先立つて、中へ入れたのだ。横堀の身なりを見た途端、もしかしたら浮浪者の仲間にはいつて大阪駅あたりで野宿していたのではないかとピンと来て、もはや横堀は放浪小説を書きつづけて来た私の作中人物であつた。

茶の間へ上つて、電気焔炉のスイッチを入れると、横堀は思わずにじり寄つて、垢だらけの手をぶるぶるさせながら焔炉にしが

みついた。

「待てよ、今お茶を淹れてやるから」

家人は奥の間で寝ていた。横堀は蝨をわかせていそうだし、起せば家人が嫌がる前に横堀が恐縮するだろう。見栄坊の男だった。だからわざと起さず、紅茶を淹れ、今日搗いて来たばかりの正月の餅を、水屋から出して焜炉の上に乗せ乍ら、

「どうしてた。大阪駅で寝ていたのか。浮浪者の中にはいつていたのか」とはじめて訊くと、案の定へえとうなだれた。

「顔どうしたんだ」

「出入をやりましてん」左の眼を押えて、ふと凄く口を歪めて笑った。大きく笑うと痛いのであろう。

「出入つて、博徒の仲間にはいったのか、女出入か、縄張りか」
それならまだしも浮浪者より気が利いていると思つたが、

「闇屋の天婦羅屋イはいつて食べたら、金が足らんちゆうて、袋叩きに会いましたん。なんし、向うは十人位で……」

「ふーん。ひどいことをしやがるな。——おい、餅が焼けた。食べろ」

「へえ。おおけに」

熱い餅を掌の上へ転がしながら、横堀は破れたズボンの上へポロポロ涙を落した。ズボンの膝は血で汚れていた。横堀は背中をまるめたままガツガツと食べはじめた。醜くはれ上った顔は何か狂暴めいていた。

私はそんな横堀の様子にふっと胸が温まったが、じっと見つめているうちに、ふと気がつけば私の眼はもうギラギラ残酷めいていた。横堀の浮浪生活を一篇の小説にまとめ上げようとする作家意識が頭をもたげていたのだ。哀れな旧友をモデルにしようとしている残酷さは、ふといやらしかったが。しかしやがて横堀がポツリポツリ語りだした話を聴いているうちに、私の頭の中には次第に一つの小説が作りあげられて行つた。

六

中支からの復員の順位は抽籤できまつたが、籤運がよくて一番

船で帰ることになった。

十二月二十五日の夜、やっと大阪駅まで辿りついたが、さてこれからどこへ行けば良いのか、その当てもない。昔働いていた理髪店は恐らく焼けてしまっているだろうし、よしんば焼け残っていても、昔の不義理を思えば頼って行ける顔ではない。宿屋に泊るといっても、大阪のどこへ行けば宿屋があるのか、おまけに汽車の中で聴いた話では、大阪中さがしても一現で泊めてくれるような宿屋は一軒もないだろうということだ。良い思案も泛ばず、その夜は大阪駅で明かすことにしたが、背負っていた毛布をおろしてくるまっついていても、夏服ではガタガタ顫えて、眼が冴えるばかりだった。駅の東出口の前で焚火をしているので、せめてそれ

に当りながら夜を明かそうと寄って行くと、無料ではあたらせない、一時間五円、朝までなら十五円だという。冗談に言っているかと思つて、金を出さずにいると、こっちはこれが商売なんだ、無料で当らせては明日の飯が食えないんだぞと凄んだ声で言い、これも食うための新商売らしかった。大人しく十五円払うと所持金は五十円になつてしまつた。

夜が明けると、駅前の中野市が開くのを待つて女学生の制服を着た女の子から一箱五円の煙草を買つた。箱は光だったが、中身は手製の代用煙草だった。それには驚かなかつたが、バラツクの中で白米のカレーライスを売っているのは驚いた。日本へ帰れば白米なぞ食べられぬと諦めていたし、日本人はみな諸ばかり食べ

ていると聴いて帰ったのに、バラックで白米の飯を売っていると
はまるで嘘のようであった。値をきくと、指を一本出したので、
煙草の五円に較べれば一皿一円のカレーライスも安いと思ひ、十
円札を出すと、しかし釣は呉れず、黒いジャケツを着たひどい訛
の大男が洋食皿の上へ普通の五倍も大きなスプーンを下向きに載
せて、その上へ白い飯を盛り、カレー汁を掛けるのだった。スプ
ーンが下向き故皿との間に大きな隙間が出来る。その隙間の分だ
け飯を節約してあるわけだと、狡いやり方に感心した。バラック
を出ると、一人の男があのカレー屋はじめ露天だったが、しこ
たま儲けたのか二日の間にバラックを建ててしまった、われわれ
がバラックの家を建てるには半年も掛るが、さすがは闇屋は違

ったものだど、ブツブツ話し掛けて来たので相手になつていると、煙草を一本無心された。上品な顔立ちで煙草を無心するような男には見えなかつた。

しかし、掌の上へひろげた新聞紙にパンを二つ載せて、六円々々と小さな声でポソポソ呟いている中年の男も、以前は相当な暮しをしていた人であろう、立派な口髭を生やしていた。その男の隣にしゃがんでいる女は地面に風呂敷包みをひろげて資生堂の粉ハミガキの袋を売っていた。袋は三個しかなく、早朝から三個のハミガキ粉を持って来て商売になるのだろうかど、ひとごとでなく眺めた。自分もいつかはこの闇市に立たねばならぬかも知れぬのだ。親子三人掛かりで、道端にしゃがみながら、巻寿司を売つ

ているのもいた。

闇市を見物してしまおうと、新世界までトボトボ歩いて行つたが、昔の理髪店はやはり焼けていた。焼跡に暫らく佇んで、やがて新世界の軍艦横丁を抜けて、公園南口から阿倍野橋の方へ広いコンクリートの坂道を登って行くと、阿倍野橋ホテルの向側の人道の隅に人だかりがしていた。広い道を横切つて行き、人々の肩の間から覗くと、台の上に円を描いた紙を載せて、円は六つに区切り、それぞれ東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸の六大都市が下手な字で書いてある。台のうしろでは二十五六の色の白い男が帽子を真深に被つて、

「さア張つたり張つたり、十円張つて五十円の戻し、針を見てい

る前で廻すんだから絶対インチキなしだ。度胸のある奴は張つてくれ。さア神戸があいた、神戸はないか」と呶鳴っている。

誰かがあいていた神戸の上へ十円載せると、呶鳴っていた男は俄かづくりのルーレットの針を廻す。針は京都で停る。紙の上の十円札は棒でかき寄せられ、京都へ張っていた男へ無造作に掴んだ五枚の十円札が渡される。

「——さアないか。インチキなしだ。大阪があいた。大阪があいた」

誰も大阪へ張る者がいない。ふと張ってみようという気になった。ズボンのポケットから掴み出して大阪の上へ一枚載せた。針が動いた、東京だ。

「さアないかないか」

もう一度早い目に大阪へ張った。が、横浜だ。

「——さアないかないか」

残っていた五円札を京都の上に乗せようとする、と、

「五円はだめだ。十円ないのか。十円で五十円だ」と断られた。

しかしポケットにはその五円札一枚しかなかったのだ。さすが

ご立去って、阿倍野橋の大鉄百貨店の横で、背負っていた毛布をおろして手に持ち、拡げて立っていると、黙っていても人が寄って来ていくらだときく。百円だというと、買って行った。隣で台湾館を売っていた男が、あの毛布なら五百円でも売れる、百円で売る奴があるかというのを背中で聴きながら、ホテルの向い側へ

引き返し、大阪一点張りに張つてみたが、半時間もたたぬうちに百円が飛んでしまった。

帰りの道は夏服の寒さが一層こたえた。が、帰りの道といつてもどこへ帰ればよいのか。大阪駅以外にはない。残っていた五円で焼餅を一つ買い、それで今日一日の腹を持たすことにした。駅の近所でブラブラして時間をつぶし、やっと夜になると駅の地下道の隅へ雑巾のように転つたが、寒い。地下道にある阪神マーケットの飾窓のなかで飾人形のように眠っている男は温かそうだとふと見れば、飾窓が一つ空いている。ありがたいと起きて行き、はいろいろとすると、繩の帯をした薄汚い男が、そこは俺の寢床だ、借りたけりや一晚五円払えと、土蜘蛛のようなカサカサに乾いた

手を出した。が、一銭もない。諦めて元のコンクリートの上へ戻ったが、骨が千切れそうに寒くて、おまけにペコペコだ。思い切つて靴を脱ぎ、片手にぶら下げて、地下道の旅行調整所の前にうずくまつて夜明しをしている旅行者の群へ寄つて行き、靴はいらんか百円々と呶鳴ると、これも安いのかすぐ売れた、十円札にくずして貰い、飾窓へ戻り二晩分十円先払いして、硝子の中で寝た。昔馴染んだ飛田の妓の夢を見た。

夜が明けると、まず十円のカレーライス。はだしでは歩けないと八ツ割草履をかうと、二十円取られた。残つた六十円を持つて阿倍野橋へ出掛けたが、やはり大阪一点張りに張っているうちに、最後の十円札も消えてしまった。二晩分の飾窓の家賃を先払いし

て置いたのがせめてもの慰めであつた。隣の飾窓で蝨をつぶしている音を聴きながら、その夜を明かすと、もう暮の二十八日、闇市の雑鬧は急に増えて師走めいた慌しさであつた。被つていた帽子を脱いで、五円々々。やつと売れたが、この金使つてしまつては餓死か凍死だと、まず阪急の切符売場で宝塚行き九十銭の切符五枚買った。夕方四時半から六時半まで切符は売止めになる。その時刻をねらつて、売場の前にずらりと並んだ客に、宝塚行き一枚三円々々と触れて歩くと、すぐ売れてしまった。勘定すると五円の金が十五円五十銭になっていた。阿倍野橋へ行くにはもう時間が遅いし、何よりも腹がペコペコだ。バラツクの天婦羅屋へはいつて一皿五円の天婦羅を食べ、金を払おうとすると掏られてい

た。無銭飲食をする気かと袋叩きに会い、這うようにして地下道へ帰り、痛さと空腹と蝨でまんじりともせず、夜が明けると一日中何も食わずにブラブラした。切符を買う元手もなければ売る品物もない。靴磨きをするといつても元手も伝手も気力もない。ああもう駄目だ、餓死を待とうと、黄昏れて行く西の空をながめた途端……。

七

「……僕のことを想いだして、訪ねて来たわけだな」

「へえ」と横堀は笑いながら頭をかいた。今夜の宿が見つかった

のと、餅にありついたので、はじめて元気が出たのであろう。

「電車賃がよくあつたね」

「線路を伝うて歩いて来ましてん。六時間掛りました。泊めて貰へんと思いましたが……」時計が夜中の二時を打った。

「泊めんことがあるものか。莫迦だなア。電車賃のある内にどうしてやって来なかつたんだ」

「へえ。済んまへん」

「途中大和川の鉄橋があつただらう」

「おました。しかし、踏み外して落ちたら落ちた時のこつちや。いつそのことその方が楽や、一思いに死ねたら極楽や思いましたん」

そんな風に心細いことを言っていたが、翌朝冬の物に添えて二百円やると、

「これだけの元手があつたら、今日び金儲けの道はなんぼでもおます。正月までに五倍にしてみせます」横堀はにわかには生き生きした表情になつた。

「ふーん。しかし五倍と聴くと、何だかまた博奕にひつ掛りそうだな。あれはよした方がいいよ。人に聴いたんだが、あれは本当は博奕じゃないんだよ。博奕なら勝つたり負けたりする筈だが、あれは絶対に負ける仕組みだからね。必ず負けると判れば、もう博奕じゃなくて興行か何かだろう。だから検挙して検事局へ廻しても、検事局じゃ賭博罪で起訴出来ないかも知れない、警察が街

頭博奕を放任してるのもそのためだと、嘘か本当か知らんが穿つたことを言っていたよ。まあそんなものだから、よした方がいいと思うな」

「いや、今度は大丈夫儲けてみせます」

と、横堀は眼帯をかけながら、あれからいろいろ考えたが、たしかにあの博奕にはサクラがいて、サクラが張った所へ針の先が停ると睨んだ、だから今度はまず誰がサクラと物色して、こいつだなど睨んだらその男と同じ所へ張れば、外れっこはないんだとペラペラ喋って、

「——ま、見てとくなはれ。わても男になつて来ま」

そう言つてソワソワと出て行つた後姿を二階の窓から見ると、

痛々しい素足だった。まだ電車は来まいと、家人に足袋を持たせて後を追わせながら、しかし私は横堀をモデルにした小説を考え
ていた。

十銭芸者の話も千日前の殺人事件の話も阿部定の話も、書けばありし日を偲ぶよすがになるとはいうものの、今日の世相と余りにかけ離れた時代感覚の食い違いは如何ともし難く、世相の哀しさを忘れて昔の夢を追うよりも、まず書くべきは世相ではあるまいか。しかも世相は私のこれまでの作品の感覚に通じるものがあり、いわば私好みの風景に満ちている。横堀の話はそれを耳かきですくって集めたようなものである。けちくさい話だが、世相そのものがけちくさく、それがまた私の好みでもあろう。

ペンを取ると、何の渋滞もなく瞬く間に五枚進み、他愛もなく調子に乗っていたが、それがふと悲しかった。調子に乗っているのは、自家葉籠中の人物を処女作以来の書き馴れたスタイルで書いているからであろう。自身放浪的な境遇に育って来た私は、処女作の昔より放浪のただ一色であらゆる作品を塗りつぶして来たが、思えば私にとって人生とは流転であり、淀の水車のくりかえす如くくり返される哀しさを人間の相と見て、その相をくりかえしくりかえし書き続けて来た私もまた淀の水車の哀しさだった。流れ流れて仮寝の宿に転がる姿を書く時だけが、私の文章の生き生きする瞬間であり、体系や思想を持たぬ自分の感受性を、唯一所に沈潜することによって傷つくことから守ろうとする走馬燈の

ような時の場所のめまぐるしい変化だけが、阿呆の一つ覚えの観
いであつた。だから世相を書くといいながら、私はただ世相をだ
しにして横堀の放浪を書こうとしていたに過ぎない。横堀はただ
私の感受性を借りたくぐつとなつて世相の舞台を放浪するのだ、
なんだ昔の自分の小説と少しも違わないじゃないかと、私は情な
くなつた。

「いや、今日の世相が俺の昔の小説の真似をしているのだ」

そう不遜に呟いてみたが、だからといって昔のスタイルがこの
のこはびこるのは自慢にもなるまい。仏の顔も二度三度の放浪小
説のスタイルは、仏壇の片隅にしまつてもいいくらい蘇苔が生え
ている筈なのに、世相が浮浪者を増やしたおかげで、時を得たり

と老女の厚化粧は醜い。

そう思うと、もう私の筆は進まなかったが、才能の乏しさは世相を生かす新しいスタイルも生み出せなかった。思案に暮れていくうちに年も暮れて、大晦日が来た。私はソワソワと起ち上ると外出の用意をした。

「年の瀬の闇市でも見物して来るかな」

呑気に聴えるが、苦しまぎれであつた。西鶴の「世間胸算用」の向うを張つて、昭和二十年の大晦日のやりくり話を書こうと、威勢は良かったが、大晦日の闇市を歩いてその材料の一つや二つ拾つて来ようと、まるで債鬼に追われるように原稿の催促にせき立てられた才能乏しい小説家の哀れな闇市見物だつた。

「西鶴は『詰りての夜市』を書いてるが、俺の外出は『詰りての闇市』だ」

そう自嘲しながら、難波で南海電車を降り、市電の通りを越えて戎橋筋の闇市を、雑闇に揉まれて歩いていたが、歌舞伎座の横丁の曲り角まで来ると、横丁に人だかりがしている。街頭博奕だなど直感して横丁へ折れて行くと果して、

「さア張ったり張ったり。度胸のある奴は張ってくれ。十円張って五十円の戻しだ。針は見ている前で廻すんだから、絶対インチキなしだ。あア神戸があいた。神戸はないか神戸はないか」と呶鳴っている。

横堀がやられたのはこれだなど思つて、ひよいと覗くと、さア

ないかと呶鳴っているのは意外にも横堀であつた。昨日出て行つた時に較べて、打つて変つたように小ざつぱりして、オーバも温かそうだ。靴もはいていた。

「よう」と声を掛けようとすると、横堀も気づいて、にこつと笑つて帽子を取つた。人々は急に振り向いた。街頭博奕屋がお辞儀をしたので、私を刑事か親分だと思つたのかも知れない。

ここそそ立ち去つて雁次郎横丁の焼跡まで来ると、私はおやつと思つた。天辰の焼跡にしよんぼり佇んでいる小柄な男は、料理衣こそ着ていないが天辰の主人だと一眼で判り、近づいて挨拶すると、

「やア、一ぺんお会いしたいと思つてました」とお世辞でなくな

つかしそうに眼をしよぼつかせて、終戦後のお互いの動静を語り合ったあと、

「——この頃は飲む所もなくしてお困りでしょう」と言っていたが、何思ったか急に、「どうです私に随いて来ませんか、一寸面白い家があるんですがね」と誘った。

「面白い家って、怪しい所じゃないだろうね」

「大丈夫ですよ。飲むだけですよ。南でバーをやった女が焼けだされて、上本町でもた家を借りて、妹と二人女手だけで内緒の料理屋をやってるんですよ」

「しもた屋で……？ ふーん。お伴しましょう」

戎橋から市電に乗り、上本町六丁目で降りるともう黄昏れてい

た。寒々とした薄暗い焼跡を上本町八丁目まで歩き、上宮中学のまえを真つ直ぐ三町ばかり行くと、右側にこぢんまりした二階建のしもた家があった。

「ここです」天辰の主人が玄関の戸をあけると、その鈴の音で二十前後の娘が出て来た。唇をきつと結び、美しい眼をじつと見据えたその顔を見た途端、どきんとした。「ダイス」のマダムの妹だったのだ。妹は私に気づいたが、口は利かず固い表情のまま奥へはいった。やがて羽織を着た女が奥から出て来て、「あら」と立ちすくんだ。窶れているが、さすがに化粧だけは濃く、「ダイス」のマダムであった。

「——どないしてはりましたの」

「どないもしてないが……」

「痩せはりましたな」

「そういうあんたも少し」

「痩せてスマートになりましたやろ」

「あはは……」

それが十銭芸者の話を聴いた夜以来五年振りに会う二人の軽薄な挨拶だった。笑ったが、マダムの窠れ方を見ながらでは、ふと虚ろに響いた。

「なんだ、お知り合いでしたか、丁度よかった。じゃ忘年会ということにして……」

天辰の主人の思いがけない陽気な声に弾まされて、ガヤガヤと

二階へ上る階段の途中で、いきなりマダムに腕を抓られた。ふと五年前の夏が想い出されて、遠い想いだつた。

けれど、やがて妹が運んで来た鍋で、砂糖なしのスキ焼をつつきながら飲み出すと、もうマダムは不思議なくらい大人しい女になつて、

「——お客さんはまアぼつぼつ来てくれはりまつけど、この頃は金さえ出せば闇市で肉が買えますし、スキ焼も珍らしゆうないし、まア来てくれるお客さんはお二人は別でつけど、食気よりも色気で来やはンのか、すぐ焼跡が物騒で帰ねんさかい泊めてくれ。お泊めすると、ひとりで寝るのはいやだ、あんたが何だつたら妹を世話してくれ。まるで淫売屋扱いだす。つくづく阿呆な商売した

思て後悔してますねんけど、といつて、おかしな話だっけど妹と二人でも月に二千円はいりまっしやろ。わてがもう一ぺん京都から芸者に出るいうても支度に十万円はいりますし、妹をキャバレエへ出すのも可哀相やし、まア仕様がない思つてやってまんねん」

世帯じみた話だった。パトロンは無さそうだし、困つても自分を売ろうとしないし、浮気で淫蕩的だったマダムも案外清く暮しているのかと、私はつぎの当ったマダムの足袋をふと見ていた。

新しい銚子が来たのをしおに、

「ところで」と私は天辰の主人の方を向いて、

「——あの公判記録は助かりましたか」と訊くと、

「いや焼けました。金庫と一緒に……」ぽつんと言つて、眼をし

よぼつかせ、細い指の先を器用に動かしながら、机の上にこぼれた酒で鼠の絵を描いていた。

「そりや惜しいことしましたな。帝塚山のお宅の方は助かったんだから、疎開させとけば……」と言い掛けると、

「阿呆らしい。帝塚山へあの本が置けるものですか。第一……」
そして暫らく言い詰っていたが、やがて思い切つて言いましたよ
うと、置注ぎの盃をぐつと飲みほした。

「——実はお二人の前だけの話だけど、あのお定という女は私と一寸関係がありましたね……」

「えっ？」

「話せば長いが……」

店が焼けてから飲み覚えた酒に、いくらか酔っていたのであるう、天辰の主人は問わず語りにポツリポツリ語った。

——天辰の主人は四国の生れだが、家が貧しい上に十二の歳に両親を亡くしたので、早くから大阪へ出て来て、随分苦労した。十八の歳に下寺町の坂道で氷饅頭を売ったことがあるが、資本がまるきり無かった故大工の使う匏の古いので氷をかいて欠けた茶碗に入れ、氷饅頭を作ったこともある。冷やし飴も売り、夜泣きうどんの屋台車も引いた。競馬場へ巻寿司を売りに行ったこともある。夜店で一銭天婦羅も売った。

二十八の歳に朝鮮から仕入れた支那栗を売って、それが当って相当の金が出来ると、その金を銀行に預けて、宗右衛門町の料亭

へ板場の見習いにはいり、三年間料理の修業をした後、三十一歳で雁次郎横丁へ天辰の提灯を出した。四年の間に万とつく金が出て、三十五歳で妻帯した。細君は北浜の相場師の娘だったが、家が破産して女専を二年で退学し、芸者に出なければならぬ破目になっていたところを、世話する人があつて天辰へ嫁いだのだつた。勿論結納金はかなりの金額で、主人としては芸者を身うけするより、学問のある美しい生娘に金を出す方が出し甲斐があると思つたのだが、これがいけなかつた。新妻は主人に体を許さうとしなかつた。自分は金で買われて来たらしいが、しかし体を売るのは死ぬよりもいやだと、意外な初夜の言葉だつた。おれがいやかと訊くと、教養のない男はいやだと言つて触れさせない。それ

でも三年後には娘が生れたのだから、全然そんなことはなかつたわけではないが、そんな時細君の体は石のように固く、氷のように冷たく、ああ浅ましい、なぜ女はこんな辛抱をしなければならぬのかと、聖書を読むのである。

もともと潔癖性の女だったが、宗教に凝り出してからは、ますますそれがひどくなって食事の前に箸の先を五分間も見つめていることがある。一日に何十回も手を洗う。しまいには半時間も掛って洗っているようになり、洗って居間へ戻る途中廊下で人にすれ違うと、また引き返して行って洗い直すのである。

おまけに結婚後十日目には、頭髪がすっかり抜けてしまい、つるつるの頭になつたのでカツラを被つた。時々人のいない所でカ

ツラを取って何時間も掛って埃を払っている——そんな姿を見ると、つくづく嫌気がさして来たある夜、どう魔がさしたのかポン引に誘われて一夜女を買った。ところが、その女はそんな所の女とは思えないくらい美人で、金で売り乍ら自分から燃えて行く肌の熱さは天辰の主人をびっくりさせた。この女が明日は自分以外の男を客に取るのかと、得体の知れない激しい嫉妬が天辰の主人をおろおろさせてしまった。すぐ金を出して、女を天下茶屋のアパートに囲った。一月の間魂が抜けたように毎夜通い、夜通し子供のように女のいいつけに応じている時だけが生き甲斐であったが、ある夜アパートに行くと、いつの間にもどこへ引き越したのか、女はもうアパートにいなかった。通り魔のような一月だったが、

女のありがたさを知ったのはその一月だけだった。黙って行方をくらませた女を恨みもせず、その当座女の面影を脳裡に描いて合掌したくらいだった。……

「——うちの禿げ婆のようなものも女だし、あの女のようなものいるし、女もいろいろですよ」

「で、その女がお定だったわけ……?」

「三年後にあの事件が起つて新聞に写真が出たでしょうが、それで判ったんですよ。——ああえらい恥さらしをしてしまった」

ふつと気弱く笑った肩を、マダムはぽんと敲いて、

「書かれまっせ」と言った。

その時襖がひらいて、マダムの妹がすつとはいつて来た。無器

用にお茶を置くと、黙々と固い姿勢のまま出て行った。

紫の銘仙を寒そうに着たその後姿が襖の向うに消えた時、ふと私は、書くとすればあの妹……と思いつながら、焼跡を吹き渡つて来て硝子窓に当る白い風の音を聴いていた。

青空文庫情報

底本：「定本織田作之助全集 第五卷」文泉堂出版株式会社

1976（昭和51）年4月25日発行

1995（平成7）年3月20日第3版発行

入力：小林繁雄

校正：伊藤時也

2000年3月17日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

世相

織田作之助

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>